

近代産業振興政策下における輸出刺繍の美術史的考察

—贈答品・美術品・輸出品として—

松原 史 (京都大学)

近代の刺繍工芸は、美術史において現在までほとんど研究されることはなかった。工芸の一分野である染織の、さらに一分野に過ぎないと考えられている近代の刺繍工芸であるが、国内外に残る数少ない作品や、万国博覧会・内国勸業博覧会における受賞履歴、皇室の買い上げ履歴から、美術品としての質の高さを窺うことが出来る。また、当時の貿易統計からは、かなりの規模で刺繍製品の輸出が行われていたことが読み取れる。刺繍製作の中心地であった京都では、明治四十四年の貿易輸出高が百万円に迫っており、これは統計内の製品区分中で第一位を記録するものである。輸出刺繍が外貨獲得を担う産業品としても重要な地位を占めていたことが指摘できる。

近代の刺繍は、幕末の動乱、明治維新による社会混乱の中で販路を海外に求めた。明治政府も、殖産興業政策の中で美術工芸を重要輸出品と位置づけ、様々な輸出振興策を講じた。その結果、従来の服飾装飾や仏教関連装飾に留まらない、多様な形態や用途の刺繍工芸品が制作され、輸出されていったのである。例えば、万国博覧会において美術館に展示するための刺繍画の製作、海外の室内装飾に対応した刺繍による屏風、衝立、額絵の製作は、近代に特徴的なものである。

これら海外での使用を念頭において制作された刺繍作品は、各種博覧会での売買、外国人商人による買付、来日外国人による土産品としてなど様々な経路で海外へと運ばれていった。イギリスのヴィクトリア&アルバート博物館、アッシュモレアン博物館には、発表者が現地で確認した範囲で五点の刺繍作品が収蔵されており、フランスの装飾・織物博物館にも刺繍作品の所在が確認されている。また、現代の西洋美術市場においても少なくとも数十点の明治大正期の刺繍作品の取引が確認できる。

本発表では、現存作品および内外博覧会関連資料、皇室関連資料、貿易関連資料に加え、新たに明らかになった製作元に残る注文販売の記録を調査し、近代すなわち明治から昭和初期までの刺繍製作および流通の実態を明らかにする。その上で、当時の日本において刺繍工芸品がどのような用途を見据えて、どのような位置づけで製作されていたのか考察しようと試みるものである。

現在ではその存在を忘れ去られたといっても過言ではない近代の刺繍工芸が、皇室・政府からの海外王室・使節に対する贈答品、万国博覧会における美術品、そして殖産興業政策下の外貨獲得のための輸出品という様々な役割を果たし、対外的な日本美術の一端を担っていたという事実を指摘していく。